

## ウィリアム・スマートの 『一経済学者の反省』と廣池千九郎(一)

大野正英

### 目次

- 一、スマートに対する廣池の評価
- 二、スマートの生涯における『一経済学者の反省』の位置づけ
- 三、『一経済学者の反省』の内容

廣池千九郎は、『道德科学の論文(以下『論文』)<sup>1</sup>』において当時の中心的経済学を利己主義に基づくものであると批判し、それに代わるものとして道德に基礎をおいた経済学の確立の必要性を主張した。廣池は、数名の欧米の学者の名を挙げ、経済及び経済学に道德を必要とするという学説を紹介しているが、その代表的なものとしてグラスゴー大学教授のウィリアム・スマートの名を挙げている。廣池がスマートの経済学説を重要視していたことは、『論文』の中で数回にわたってスマートの『一経済学者の反省(原題:A Second Thought of an Economist)』について言及し、非常に高く評価していることから明らかである。

しかし、このウィリアム・スマートの名は、現在の経済学の世界ではほとんど知られていない。一般には限界効用理論のイギリスへの紹介者と見なされているが、学問上の業績はそれほど際だったものではなく、経済学事

典等にも名前が見あたらないことも多い。当時においては、現在よりも知られた存在であったとしても、一つの学派を代表する学者とは言えず、専門外である廣池の目に触れる機会はその多くはないはずであった。これまで、廣池がどういう経緯でスマートの著作に関心を抱くようになったかは明らかではなかった。また、『論文』においても『一経済学者の反省』の一部が抜粋されているものの、その具体的な内容についてはほとんど紹介されていない。

本稿ではスマートの『一経済学者の反省』の内容について紹介するとともに、廣池がいつどのようなようにしてこのスマートの著作に出会ったか、またこの著作が廣池の経済思想の形成にあたってどのような影響を及ぼしたかについての考察を行う。

### 〈注〉

- (一) 廣池は、原題の“Second Thought of an Economist”を、『論文』の中では『一経済学者の反省』としているが、その後に出された『新科学モラロジー及び最高道德の特質』においては『一経済学者の第二思想』と表記している。どちらが適切であるかは、“second Thought”の内容をどう受け取るかによって決定されるものと思う。永安幸正氏からは、『第二思想』と呼べるほどに確立した思想とはなっていないので、『反省』の方が適訳ではないかとの助言をいただいた。また中野千秋氏からは、英語における“Second thought”と“my second thought”と“it's my second thought”と“a light”と“a thought”の表現は、“It's my second thought”と“a light”の言い回しのように、“ちょっと考え直した”という程度の軽いニュアンスで用いられることもあるとの指摘をいただいた。また目黒氏の論文においては、『第二思想』という表現が用いられている。
- この問題は、単なる翻訳上の問題にとどまらず、この著作の性格そのものとも深く関係するものと思われる。本稿においては、廣池が『論文』において採った表現を採用して、『一経済学者の反省』で統一することとする。

## 一、スマートに対する廣池の評価

廣池がなぜスマートの『一経済学者の反省』を高く評価したかについて考察していくために、まず最初にこの著作に対して廣池自身が言及している部分の記述を見ていく。

廣池は、『論文』第一章において世界の文明が道德的方向に向かっていく傾向にあるとの認識を示し、経済の分野においては道德的要素を取り入れた思想が現れてきた事実を指摘し、その代表として、スマートの『一経済学者の反省』を挙げている。

このスマートの著作に対して廣池がどのような評価を与えているかを見るために、『論文』ならびに『モラロジー一経済学原論』の中でこの著作について言及している部分を抜き出してみる。

「近世の経済学と申しますものは、まず英国のアダム・スミスの『富国論』(The Wealth of Nation)以来経済と云うことは利己主義であるということに解釈されておいて、世界中の工業家も商業家もみな自己の富を作るために仕事をしておるといふことを公然と恥ざるところもなく公言しておいたのであります。しかるに英国グラスゴウ大学の教授ウィリアム・スマート氏の著作『一経済学者の反省』が近年世に出ずるに及んで、はじめて経済すなわち道德でなければならぬことが主張されてきたので、これは実に二十世紀の初頭における経済上及び産業上の温和善良なる一大革命であります。」<sup>(1)</sup>

「以上列挙する引用書によれば、従来経済学の正統派と称せらるるところのスミスの経済学説は自己利益を是認するものであります。しこうしてこの学説の普及はついに現代二十世紀における世界人心の頹廃を来たすことになったのであります。かくてその反動として、今日においてはスマートの自己犠牲もしくは道德本位の経済思想

の発生を見るに至ったのでありますから、モラロジー研究所においては今後大いにモラロジーの原理に基礎を置くところの新経済学の研究をなすはずであります。<sup>(2)</sup>

「更に欧州にては、アダム・スミスの経済学が正統派と称せられ、その他の経済学が異端のごとく称せられておったのであります。しかしながら、いま、モラロジーの立場よりこれを見るときは、アダム・スミスの経済学も決して正統派と称することは出来ないものであります。かえってその後、現れたところの英国のウィリアム・スマートの経済学説が正当に近いものかと考えられます。<sup>(3)</sup>」

「将来モラロジー研究所において引き続き研究を必要とする諸項目の概要(中略)」

(29) スマートの『一経済学者の反省』に関するごとき道徳的経済学の完成に関する研究ならびにモラロジーに立脚する新経済学の建設に関する研究<sup>(4)</sup>

以上の記述から明らかなように、廣池はスマートの学説を高く評価しているが、それは、この学説の中にアダム・スミス以来の主流派経済学に対抗しうる新しい経済学説となりうる可能性を見出したことによる。

「論文」においては、スミス、リスト、マルクスといったそれぞれの学派を代表する経済学者の思想が紹介されているが、基本となる単位は個人、国家、階級と違うとしても、三者の思想がいずれも自己ないしは自己の属する集団の利益を優先する自己利己的な経済学であるという点を批判している。中でもアダム・スミス以来の「正統派」の経済学に対しては、経済の目的が自己の欲望の充足のみにあるかのような誤った思想を人々に植え付け、その道徳心の頹廃を招いてしまったとして、繰り返し批判がなされている。

ここで重要なことは、廣池の正統派経済学批判には、二つの側面があるという点である。すなわち、理論的な批判と、その理論が現実の経済活動に対して悪影響を及ぼしたという現実面での批判である。理論面では、人間

の欲望に経済学研究の出発点をおいたところに問題があるとしている。こうした自己利益を第一とする学説は、「人間の道徳的本能及び道徳的歴史を無視せる極めて非科学的なる断定の結果なるが故に、その公平を欠けるもの<sup>(5)</sup>」であると、廣池は見なしている。廣池の考えによれば、人間社会は道徳的本能及び道徳心を基礎として起こったものであって、欲望のみを経済的動機とするのは偏った前提であるとされる。こうした理論上の批判に基づいて、廣池は次にはこのような学説が人々の意識に対して与えた影響を問題にした。すなわち、スミス本人が意図したものではなかったにせよ、スミス以来の経済学が自由競争を奨励したことによって、結果的には利己主義に基づく経済活動や経済組織ができあがってしまったと、廣池は捉えている。

このように、理論あるいは学問における現実の認識の仕方が、現実に大きな影響を及ぼしたとの見方を廣池はとっているが、これは逆に考えれば、道徳に基づいた経済学を確立することによって、現実の経済活動に関与する人々の意識を変革し、それを通じて現実の経済活動及び経済組織の改革を実現することができることになる。廣池がモラロジーを基礎とする経済学の確立を必要とした意図はここにある。

そして、廣池は、自分の目指す経済学の方向に近い学説として、スマートの経済学説を積極的に評価した。しかし、スマートの経済学説を十分なものと見なしていたわけではなく、その理論的内容およびその実効性について、次のような批判が述べられている。

「すべての欧米の経済学の著書には未だ十分に経済運用の具体案を設けるものもなく、又たとい少々説いてあつても、それは因襲的道徳か若しくはキリスト教の偏った博愛説からでたものであつて偏狭なことが多いのである。それゆえに未だこれらは十分実業界の実用に役立つものはないのであります。すでにウィリアム・スマートの学説等には積極的な道徳説が説いてありますけれど、あまりに偏つておるのでやはりイギリスでも行われてはおり

ませぬ。」

「しこうして二十世紀に入りては、ついにウィリアム・スマートの『一経済学者の反省』のごとき道德的なる新経済学説を生み出すに至ったのであります。しかしながら、このスマートの自己犠牲の経済学もまたスマートの一見解にして、聖人の伝統より出でたるものにあざれば、その説くところ道德的なるも、しかしいまだ現代の経済組織を改良する原理と力とを欠いておるのであります。すなわち人間の幸福は自己利益によりてのみ得らるべきものでないのと同じく、自己犠牲によりてのみ得らるべきものでないのではありません。」<sup>7)</sup>

以上の記述から、スマートの思想に共感を覚えながらも、廣池自身が目指す経済学にとつては不十分なものであったとの思いが読みとれる。

廣池は、スマートの学説のどこに共鳴し、またどこに不満を感じたのであろうか。スマートに対する廣池の評価については、スマートの著作の内容を概括した後で、次稿で考察することとしたい。

そこです、スマートのこの著作の内容を見ていくこととするが、その前にまずスマートの生涯を簡単に振り返り、その生涯における『一経済学者の反省』の位置づけを試みる。

### 〈注〉

- (1) 廣池千九郎著『道德科学の論文』④、三二二—三三一 (5) 同上⑧、四六—四七ページ
- (2) 同上④、三一九—二〇〇ページ (6) 廣池千九郎著『道德科学経済学原論』廣池千九郎モラロジー選集第3巻「所収」三八五—三九〇ページ
- (3) 同上⑧、一〇—一〇一ページ (7) 「論文」⑧、五九—六〇ページ
- (4) 同上①、一一—一二ページ

## 二、スマートの生涯における『一経済学者の反省』の位置づけ

スマートは、経済学史の上では、イギリスにおける限界効用学派の中心的人物の一人であり、またヘーム・バヴェルクらオーストリア学派の著作のイギリスへの紹介者であると位置づけられている。例えば、河上肇は、『経済論叢』1巻3号における『すまーと教授逝く』と題された追悼記事において、つぎのように彼の業績を紹介している。

「教授の最も主なる功績の一つはオーストリア派の学説を普及せしめた点であろう。即ち教授はヘーム・ヴァーベルクの大著資本論の訳者として、またヴェーザーの『自然価値論』英訳の編者としてさらにまた『価値論序説』の著者として、しきりにこの派の学説を英語国に紹介した人である。」<sup>1)</sup>

また『Who's Who in Economics』においては、彼の業績を次のように記載している。

「オーストリア学派の経済学者の著作の翻訳者であり、彼らの研究をイギリスに広めるに当たって多大な功績があった。彼自身の著作には、実業界における実際の体験と限界効用理論に対する熱意とのバランスが表れている。」<sup>2)</sup>

上記の記事中で紹介されているように、彼はヘーム・バヴェルクやヴェーザーの著作を英訳したが、その他に、自ら七冊の著作を出版している。以下はそのリストである。

「John Ruskin: His Life and Works” 1880

「A Disciple of Plato: A Critical Study of John Ruskin” 1883

「An Introduction of Theory of Value” 1891

“Studies in Economics” 1895

“The Distribution of Income” 1899

“Economic Annals of the Nineteenth Century” 1910

“Second Thoughts of an Economist” 1916

これらの著作のうち、ラスキン関係の二冊と『一経済学者の反省』を除けば、限界効用学説の入門書として書かれた『An Introduction to the Theory of Value』をはじめとして、すべてが正統派経済学の理論書である。その意味では、この『一経済学者の反省』は、彼の主要な業績とはまったく性格を異にする著作である。スマート自身の言葉を借りるならば、「正統派の経済学者がしばらくの間その基本職から外れて」書いた著作である。先の“Who's Who in Economics”の記事中の主要著作物のリストにこの著作の名前が載っていないのも、このためかと思われる。

『一経済学者の反省』はスマートの最晩年の著作であり、その出版は彼が亡くなった翌年の一九一六年に友人の手によってなされた。最晩年にいたって、スマートがなぜこのような性格を持つ著作を執筆するに至ったかを理解するために、彼の生涯をたどってみることにする。彼の略歴については、彼の教え子であったトーマス・ジョーンズが、『一経済学者の反省』の中で、本文に先立って長文の“Biographical Sketch”を寄稿している。略歴については、すでに目黒氏の論文において紹介されており、重複を避けるためここでは全体に触れることはせず、『一経済学者の反省』の意味づけを理解するために必要な部分に絞って詳しく見ていくことにする。

ジョーンズは、スマートの研究者としての研究発展の過程を、三つの時代に分けて論じている。まず第一期はカーライル、ラスキン、ケアードといった人々の影響下にあった時代である。次に第二期は、経済学者として、

オーストリア学派の価値の理論や、マーシャルの理論に影響を受けた時代である。第三期は貧民救恤委員会における経験から、失業、貧困、その他の社会問題に再び強い関心を向け始めた時代である。

第一期においては、直接に師事したラスキンの影響が特に大きい。彼への傾倒ぶりは、一八七九年にグラスゴーに設立されたラスキン協会の初代会長に就任したこと、ラスキンについての二冊の著作を出版していることから明らかである。しかし、数年後にスマートはラスキンの影響下を離れ、経済学者へと転向することになる。スマートは、ラスキンの思想の中に経済原理の核心を突くものが含まれていることは認めたものの、全体としてはあまりにも理想に走りすぎており、現実の経済状況から乖離した議論であると考えたのであろう。

ジョーンズによれば、経済学者への転向においては、ケアードの影響が大きい。ここで注目すべきは、この時期に女子労働および賃金について高い関心を示し、これに関する論文を執筆している点である。ここにも、スマートの社会問題に対する意識の高さがうかがわれる。

この後、ジョーンズの言う第二期においては、正統派経済学の研究、とりわけ価値論の研究に没頭することになる。先に取り上げたような、オーストリア学派の限界効用学説のイギリスにおける紹介者としての業績はこの時期のものである。彼の研究は順調に進み、一八九六年にはグラスゴー大学の「アダム・スミス・プロフェッサー」に任命されるが、この前後から、住宅問題や土地税制の問題に対しても強い関心が向けられ、こうした問題に関連する論文を発表すると同時に、実際の基金やプロジェクトにも積極的に参画していった。

こうした社会問題に対する高い関心をさらに発揮する機会となったのが、一九〇五年の貧民救恤委員会のメンバーへの任命であった。スマートはこの委員会メンバーであった期間、精力的に活動し、頻繁にグラスゴーとロンドンの間を往復した。この委員会における経験が、貧困や労働問題に対する彼の関心を強めていくことになり、

それが『一経済学者の反省』へとつながっていった。

以上の概観によっても分かる通り、スマートの研究生活の全ての期間を通して、社会問題に対する関心は、何らかの形で彼の意識の中に常に存在していたのである。彼自身が『一経済学者の反省』の中で「私がこの『反省』を執筆した意図は、私が研究を始めて以来、ずっとつきまといてきた一つの疑念を自由に解き放つことにある」と述懐しているとおり、彼の研究生活の奥深くを静かに流れていた底流が晩年に至って表面に現れてきたものであるといってもよいであろう。そして、その源流はラスキンに遡ることができであろう。彼が『一経済学者の反省』の中で彼が常にこだわり続けた「人間生活の目的」に対する問題意識、そして「それ自体が目的である人間」という考えは、明らかにラスキンの系譜に連なるものである。経済学者となってラスキンの下を離れたスマートではあったが、道徳家としてのラスキンに強く影響を受けた倫理意識は、終生彼の意識を離れなかった。この点については、次稿で触れることにする。

#### 〈注〉

(1) 京都大学『経済論叢』一卷二号(一九一五年) 四  
七五ページ

Wheatshaf Books,

(2) "Who's Who in Economics" ed. by Mark Blaug,

(3) "A Second Thought of an Economist", William Smart, 1916, p. 99

### 三 『一経済学者の反省』の内容

本章では、『一経済学者の反省』の内容をまず概観してみることにする。『一経済学者の反省』は、それぞれ三

つの章からなる二部構成となっており、合わせて六つの章から構成されている。スマートの妻キャサリンによる巻頭の序言によれば、スマート自身は結論となる章を付け加える予定であったが、それが果たされないままに死を迎えることになった。その意味では完成された論文ではないが、その主張は第6章までにほぼ全て盛り込まれていると考えてよいであろう。同書の構成は次の通りである。

#### 第1部

第1章 なぜ反省なのか

第2章 富の分配

第3章 仕事の分配

#### 第2部

第4章 再構築

第5章 消費者の責任

第6章 経営者の責任

主に第1部においては現状の分析に重点が置かれ、第2部においてはそれに基づいた経済の道徳的再構築の必要性が、需要側と供給側、すなわち消費者の側と経営者の側に分けて説かれている。以下では、章ごとにその内容を見ていくこととする。

#### (一) 第1章 なぜ反省なのか

本章では、スマートは自分が経済学者として歩んできた歴史を振り返り、その中で正統派経済学に属する自分

が従来の研究の流れから外れるこの書を執筆するにいたった理由が説明されている。

スマートは、まず、経済学の道に入る前に、自分がカーライルとラスキンの強い影響下にあったことを述べ、特にラスキンについては、個人的に親しく師事し、非常に尊敬していたことを告白している。しかし、結局スマートは、ラスキンの下を離れ、当時ラスキンが強く攻撃していた経済学の研究者の道を進むことになる。<sup>(1)</sup>

これ以後、スマートは経済学者としての生涯を送るわけであるが、長い間にわたる研究生活の中で次第に一つの疑問をその内側に抱えるようになる。それが、「経済生活がわれわれ人間をどこへ導いていこうとしているのか」という疑問である。

スマートがこうした疑問を持つようになったのは、人間は確かに豊かになったが、それに伴って経済生活、すなわち収入を得るための生活が人間の生活のすべてを支配するようになってきたと感じたからであった。そして本来人間が持っていたはずの「道徳的目的」が、人間の生活の中から消えつつあることを憂いている。

スマートは、人間が置かれたこうした状況に対して経済学では十分に答えを出すことができないのではないかと強い疑念を、心の中で抱くようになってきていた。それが研究生活を終えるにあたって「一経済学者の反省」を執筆させる最大の動機となった。

## (二) 第2章 富の分配

第1章で述べられたような問題意識を持ちながら、スマートはまず現実の経済の分析から始める。第2章において取り上げられたのは、富の分配の不等の問題である。

彼はまず、権力あるいは特権といったものが支配力を持っていた時代から、自由競争の時代になったにもかかわらず、富の分配の不平等が依然として残っているのはなぜかという問題を提起する。その答えとして、一つには人口の増加が、もう一つには人間の欲望の増大が示されている。社会全体が豊かになるにつれて、人間は欲望を増大させる。それも量的な増大ばかりではなく、質的な増大も生じる。この欲望の増大が、社会全体の富の余剰分を吸収してしまう。

スマートは、こうした不平等がなくなるならぬ理由を、経済学の「自然的分配」の原理を用いて説明している。すなわち、各生産要素は生産物におけるそれぞれの経済価値、すなわち生産物に対する寄与分に従って富を分配されるのであるから、その経済価値に違いがある限り、平等な分配は不可能である。

そこで、彼は経済システムを変えることなく、貧困層の所得を増やす方法を考える。一つは税制を通じたものである。累進課税によって政府が徴収した税金を、教育、年金、社会保険などの形で、貧困層に再分配する方法である。しかし、貧困層はそのような社会的給付より所得の増加を求める。

そこで残った他の一つの方法は、国全体での富を増加させる方法である。しかし、労働者は労働の強化につながるとしてこの方法を信じない。これに対して、スマートは、自然力をもっと活用することによって、人間の労働を強化することなく国富を増加させることは可能であると、反論する。そして、こうした自然力の活用、すなわち機械の導入は、歴史の流れであるという。

次に、スマートは、機械の導入という避けられない流れの中で、労働者がどうなっていくのかについて考察を進める。その結論は、単純労働者はその職を機械に奪われ、熟練労働者、機械監督者のみが生き残ることができるということである。これは憂鬱を見込みであるが、これに抵抗することは不可能であると、スマートは指摘する。

しかし、スマートは楽観的な見通しを持っていたようである。機械の導入は、確かに単純労働者、被熟練労働者を排除していくが、それと同時に生産要素としての新しい労働者を必要とする。それでは、ここで必要とされる労働者は何であろうか。機械よりも良い仕事ができる、あるいは機械ができない仕事ができる労働者、すなわち「考える労働者」が増加することになる。そして、彼らの増加は、彼らの上の階級に属する従来独占的地位にあった頭脳労働者との間の競争を激化させることにつながり、その結果階級間の格差を縮小することになるであろうと考えている。

それ以上にスマートが重要と考えていたことは、生産において人間の持つ「考える」という要素が強調されるという点である。これは道徳的な要請にも合致していると考えている。すなわち、人間が本来持っているはずの、精神を有した存在として自分を発達させる権利を実現させることにつながるという点に彼は希望を見出したのである。これは、キリスト教的に解釈するならば、自分の中にある神性を発展させる機会が与えられるということであると、スマートは、この章を結んでいる。

### (三) 第3章 仕事の分配

第2章では、主に経済学的な視点から、富の分配の不平等についての説明を行ってきた。しかし、スマートはそれだけでは満足せず、ここでラスキンが経済学に対して投げかけた問題に戻ろうとする。経済学においては、富とは人間の欲望を満たすモノあるいはサービスの総体であるとされた。そして、そこで問題とされているのは、経済生活、すなわち富の獲得とそれによる欲望の充足が目的とされる生活であった。これに対してラスキンは、人間が人間として存在する目的は、富の獲得や欲望の満足ではなく、LIFE、すなわち生活、生きることその

ものにあると主張した。

スマートは、ラスキンの考え方に立って、人間の生活の目的は何かということをお問おうと試みる。これが、経済学の領域からはみ出る問題であることをスマート自身は自覚していたが、それは必ずしも経済学と矛盾するものではないと考えていた。スマートによれば、ラスキンと経済学者の視点は、必ずしも相互に否定し合うものではなく、補完し合うものであるとされた。

スマートは、人間の生活の目的は何かと問い、これに対しては、来世を信じるかどうかによって、二つの答えが考えられるとしている。

一つ目は、人間が神の下からこの世に現れ、神の下へと帰っていくという、キリスト教の考えに基づくものである。この考えに従えば、人間の生活の目的は、来世へ向けての準備、教育であると考えられる。

スマートは、現在の人間の生活がはたしてそのようなものになっているかどうかと疑問を投げかける。前の章で彼が述べたように、人間の生活の大部分が、経済生活、すなわち生計を得るための生活となっている。ある職業、例えば教師などの場合には、職業生活の中に喜びや幸福が感じられるものであり、来世に向けての準備、教育として必要なものが提供されているが、その他の多くの人々にとっては、そのような喜びあふれる仕事は手の届かないものとなっている。彼らにとっては生計を立てるだけで精一杯なのである。現在が来世に向けての準備であると考えられる立場からすれば、彼らがどんなに十分な富を受け取っていたとしても、その仕事自体に意味がなければ、現在の経済システムに対する不満感は募る。この立場に立つならば、仕事をするからこそそのものに報酬があるような仕事の機会を全ての人々に与えない限り、富の蓄積は生活の目的と関係がないことになると、スマートは結論づけている。



次に、来世を前提としない場合の生活の目的について答えを出している。その答えは、現世自体がすべてであり、目的であるということになる。その目的が達せられるかどうかは、現世における幸福によって計られることになるであろう。この点については労働者の置かれている状況はどうであろうか。組織に属し、機械との競争に明け暮れる労働者たちは仕事に追われ、自分の生活というものが仕事の間には存在していない。自分の生活を取り戻すのは、仕事を終えた後の僅かな時間でしかない。生活の大部分を占める経済生活においては、目的を見いだせないままである。

以上のように、スマートは、人間の生活の目的を、来世のための準備と見る場合と、現在の生活それ自体が目的であると見る場合のいずれにおいても、同じ問題を抱えていると考えた。すなわち、現在が準備であるならば、将来の準備とはならず、現在においてさえ良心的な生活をおくる妨げとなるような仕事が多すぎる。また生活それ自体が目的であるとすれば、幸福な活動を行っているかどうかで判断する限り、多くの階級にとってそれはうまくいっていない。

#### (四) 第4章 再構築

以上の議論を通じて、スマートは、経済発展によって国内の富の総量は増加したものの、それに伴って経済生活が人間の生活の大部分を占めてしまったこと、大多数の人間の価値が経済価値、それも雇用者にとっての価値でしかなくなってしまうことを認めている。

こうした状況を改善するために、スマートは経済活動の道徳的再構築を訴える。その中心的主張は、経済生活と道徳的生活を切り離して考えるという一般的な認識から抜け出し、経済生活の中に道徳的生活を実現する余地と機会を確保すべきであるということである。これは決して経済生活の重要性を放棄することを主張するものではない。スマートは、経済学者として、個人が自己の欲望を充足しようとする経済的動機に支配的な影響を受けていることを自明のこととして認めていた。彼はそのこと自体を否定することはせず、あくまでも道徳性を發揮する余地と機会のみを経済生活の中に求めた。

彼は、視点を変えてみることによって、経済活動を人間相互間の奉仕の活動として捉えることができると考えた。人間が自己利益を動機として経済活動を行っていることは認めるとしても、その過程において相互の協力と奉仕が不可欠であることを強調したのである。このことは次のように説明される。利益を獲得するためには、全ての人々は、自分の持てる資源を提供し、相互の協力に基づいて経済活動を遂行する。経営者は自己の資本と能力と労力を、労働者は自己の労働力を、そして地主は自己の土地を提供し、それらが結合することによって生産活動が行われる。そして、そこで生産される財あるいはサービスは、消費者が必要とするものでなければならぬ。こういう視点に立って捉えるならば、経済活動はその本質において消費者に対するサービスを巡る競争であり、無意識のうちに行われている相互奉仕の協力活動である。

このように、経済活動を「人間の奉仕」として自覚的に捉えることによって、経済生活を崇高な道徳的目的を持った生活に変えていくことができるというのが、スマートがこの「一経済学者の反省」において最も訴えたかったことである。スマートにとっては、現在の経済システムそのものは、道徳的目的の導くところに従って運営されていくならば、維持していくだけの価値があるものであり、それによってより高次の目的に向けて奉仕するように経済システムを再構築することは可能であると考えた。スマートのいう再構築とは、経済生活そのものの再構築ではなく、その動機の再構築なのであった。

このような道徳的再構築は、二つの領域において可能であると、スマートは考えた。一方は消費であり、他方は生産である。この後の二つの章では、それぞれの領域における再構築の手段について議論が展開されている。

#### (四) 第5章 消費者の責任

まず、スマートは、消費者が、経済活動の遂行にあたって責任を持つていることを指摘し、消費者の責任を問題とする。その理由は、生産組織に対して生産の動機付けを与える役割を果たすのが、消費者であるからである。生産者が何を生産し、どのような価格を設定するかは、消費者の需要によって決定される。

しかし近代社会においては、消費者は自分がこのような責任を持つていることをほとんど認識していない。スマートは、この理由についていくつかの説明を与えている。一つには、消費者は商品の入手に際して、自らの注文によるのではなく、生産者によって提示されたデザイン、機能、価格を持つ商品群の中から、選択して購入するようになったことが挙げられる。次に、消費者と生産者の間の相互認識が稀薄になりつつあることが指摘している。その他に、貨幣の流通が重要でありその内容は問わないという風潮もその理由としている。いずれの理由にしろ、消費者は、その責任を自覚する機会をなくしている。

そこで、責任を自覚した消費者が自分の消費行動に道徳原理を導入したいと考えるならば、自己の行う支出が(一)他人の支出に対して、(二)自分が購入する商品を供給している人々の幸福に対して、それぞれどのような影響を与えるかを考えなければならぬ。

しかし、スマートは、ここでは消費者が具体的にどのようなように、あるいは何を消費するかについては触れようとしない。自分の消費がどうあるべきかについては、全ての人が自己決定の自由を持っているからである。ここで、

彼が消費者としての責任を自覚した者に対して求めていることは、自己の良心に従ってよく考慮し、計画を立てた上で消費を行うようにということである。

彼が問題にしようとしているのは、こうした個別の問題ではなく、消費者の責任という考えに基づいた「需要の再構築」が社会全体の幸福に対してどのような影響を与えるかということである。

ここで、スマートは、犠牲を伴わないで責任ある消費を実行する方法として、浪費を止めることを強く主張する。彼は、浪費を、誰も利用することなく、誰の欲望も満足することのない富の破壊であると定義している。そして、他の貧しい人々が多くの物を求めている状態を知っているにもかかわらず、浪費を続けるのであれば、それは不道徳であると、スマートは強く非難する。

しかし、現実には、浪費に対しては無関心ともいえる状態が続いている。この原因として二つの懸念が持たれていることをスマートは指摘している。一つには浪費を抑えることによって節約された富が、はたして本当に貧しい人々にわたるのであろうかという点について、他の一つは、浪費を止めることによって、その浪費の対象となる商品を生産していた人々に影響がでるのではないかという点についてである。

スマートは、こうした懸念に対して、次のように答えている。前者については、浪費に資金が向けられる前の段階でそれを止めることによって、余剰となる資金を貧者に回すことができるのではないかとしている。後者については、短期的には悪影響が出るのは避けられないことは認めるが、長期的には浪費を抑えることによって節約された資金は他の方法で支出されることになり、別の分野での雇用が増えることになるであろうと、楽観的な見通しをとっている。

スマートは、結局のところ、消費の領域における再構築は、従来の経済システムを大きく変革するものでも、

経済法則に干渉するものでもない主張している。彼が求めたものは、あくまでもその動機の変革であり、それに基づく各個人の消費パターンの変更である。したがって、それはこの変化を察知した生産側の変更を通じてはじめて社会的に影響力を及ぼすものであるから、供給側の再構築が必要不可欠となる。

#### (六) 第六章 経営者の責任

現実の経済の状況を考えてみると、需要側の道徳的再構築のみでは、社会に対して大きな影響力を及ぼすことは期待できないと、スマートは考えている。それゆえ、供給側の道徳的再構築、すなわち経営者の責任の自覚こそが、彼が最も強調する点である。

彼は、経営者と労働者との間の関係が労働力という商品の売買という関係であるとの認識が一般的になりつつある現状に対して、非常に大きな危機感を抱いていた。労働者が、労使関係に対してこのように機械的な態度をとる限り、良識ある経営者に対しても、悪い経営者に対するのと同様の攻撃が加えられることになるだろう。それによって、道徳的責任をとろうとする良識ある経営者の熱意は失われてしまうことになる。

こうした関係を危惧したスマートは、労働と資本の双方が互いを必要としているという事実の上に立ち、両者に対して警告を発している。すなわち、一方では資本は過去の労働者との協力の上に蓄積された富であり、他方では、労働者が働く機会を与えているのは、過去の蓄積である資本に他ならないからである。両者がこうした関係にある以上、両者の協同関係は今後も生産を続けていく上で必要不可欠のものであり、この両者を結び付けていくという経営者の担うべき役割は非常に重大であるというのが、スマートの認識であった。このような微妙な労使関係といった状況下では、経営者の機能は非常に複雑になり、その責任は重くなり、特殊な資質が求められるようになってきている。特に労働者に対する十分な忍耐と理解が必要とされている。

スマートは、時代の変化によって経営者に求められるものが変化しつつあることを指摘している。すなわち、ほとんどの国民が一様に貧しい時代においては、産業にとつての障害を取り除き、生産とそれに基づく富の蓄積を推進することが、何よりも必要であった。そうした状況下では、自ら資金をつぎこみ、資本と労働を組織化し、生産を行なう経営者は、それだけで社会にとつて恩恵をもたらす存在であった。そこでは、その動機を問われることはなかった。しかし、経済の発展により、ほとんどの国民がある程度の生活が保証されるようになった現在、大衆は経営者に対して利己的な利益の追求から離れるように求めているのである。

経営者に対する社会的要求の変化をふまえて、スマートは、生産側における道徳的再構築として、経営者に対して自己の役割と責任の見直しを求め、スマートによれば、経営者は、自らを公共に対する奉仕者として捉え、そのビジネスを道徳的義務と考えなければならぬのである。すなわち、経営者は産業を指揮する者として、リスクを担い、労働と資本がともにうまく活用されるような組織を構築し、効率的な生産を行わなければならないというのである。

経営者がこうした役割を果たすためには、次のような考慮すべき四つの要素があると、スマートは指摘する。

(1) 経営者自身 (2) 競争相手 (3) 大衆 (4) 労働者

この四つのうち、いずれを優先すべきかは、その場合において異なるが、そのいずれかをないがしろにすることは許されない。

ここで、スマートの議論は、特に労働者に対する責任に向けられる。労働と資本の組織化の過程において、労働者が最も力を発揮することのできる場所と条件とを労働者に提供することが、経営者の社会的義務であるとし

ている。社会に対して良い商品を提供するのと同じように、労働者に対しても生きる価値のある生活を提供しなければならぬとされた。

しかし、消費者に関する議論と同様に、雇用者に対する要求も、あくまでも経済的に非合理的なものではなかった。生産が耐えられないような犠牲を経営者に対して求めようとはしなかった。労働者に対する道德的配慮と経営の合理性とは十分に両立しうるものとスマートは考え、その例として、二つの事例を提示している。

一つ目として一九二〇年代のロバート・オーエンの工場経営の例が挙げられている。それに続いて実際に実践に移されている経営の例が列挙されている。正規の機関を通じた雇用、企業内における教育訓練、継続的雇用の保障、標準化された賃金、労働時間の短縮と平準化、個人的能力開発の奨励、早期の年金の支給、医師やソーシャル・ワーカーの提供、福利厚生施設の提供などが、実行に移されている例として紹介されている。

また、こうした企業が、経済的にも成功を取めていること、つまりこうした様々な施策に対する支出が経済的に見合うものであることが特に強調されている。スマートは、この理由を、次のように説明している。第一に、こうした様々な施策が、労働者の心身両面における状態を良好に保つことに役立ち、それが生産性を高めていること、第二に、労使間の長期的な人間関係が良好な状態で保たれ、経営側を敵視するような雰囲気醸成を防いでいること、第三に、経営者の抱える課題の困難さについて労働者が認識することが、その理由である。

次に、スマートは、こうした新しい雇用の特徴を次のようにまとめている。

第一に、経営者が、各労働者に対してそれぞれに適した職を提供し、その職に応じた訓練を受けさせることを自らの義務として捉えていること、第二に、個々の肉体条件や性差を考慮に入れ、うまく機能するように全体を調整していること、第三にできるかぎりの労働時間の短縮を図ること、第四に最低でも標準賃金は保証し、必要

に応じては出来高払いを導入すること、第五に労働者に対して階級に対する忠誠心を放棄させるように強制することなく、労働組合とも良好な関係を維持していること、第六に、労働者に対して継続的雇用を保証するという重大な責任を自らが負っているということを自覚していること、である。

スマートは、中でも最後の継続的雇用の維持という責任を特に重視している。当時一般の労働者にとっては、ひとたび職を失ってしまうと再就職先を見つけたことは相当に困難で、失業は家族の生活を直接脅かす問題であった。その意味で、労働者の雇用を保障することが経営者にとっての最大の責務であると、スマートは考えたのであった。

以上のように、スマートは労働者に対する経営者の責任を強調したが、彼が真に関心を持ち、経営者に対して求めたものは、さらにその先にあった。それは、労働者の労働生活に対する意味付けの問題であった。経済生活、つまり生計を立てるための生活が生活の大部分を占めているのであれば、そこにどのような意味を持たせることができるかが、スマートにとっての最大の関心事であった。どれほど高い賃金が支払われ、良好な労働条件が与えられようとも、その仕事が無意味に感じられるものであるならば、労働者はそこに人間としての目的を見出すことはできない。これはまた、経営者にとっての新しい責任を意味している。すなわち、労働者に対して、自分の仕事及びその成果に対して関心を抱かせ、自分の置かれたポジションにおいて最善を尽くさせるという役割である。

『一経済学者の反省』は、スマートの死によって完成されなかった結論の章を残して、ここで終わっている。同書を持つ意味やその思想の特徴については次章で検討していく。

〈注〉

(1) ラスキンはこのことを驚きと憤慨を持って受けとめたが、スマート自身にとっては、ラスキンの考えと経済学の間には、それほど大きな矛盾が存在しているわけではないと考えていた。ラスキンは、自分がこうあるべきであるという理想の世界像という視点から経済

学を攻撃していたのに対して、経済学者はあくまでも現実の経済の姿を説明することをその目的としていたという点に違いがあったのだと、考えていた。

(次稿に続く)